
神に呼ばれて来てみれば

k e y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神に呼ばれて来てみれば

【Nコード】

N0794H

【作者名】

key

【あらすじ】

外見マフィアのちよい悪神に呼ばれて来てみれば

1話 幾度目かの死の危険

俺は今、今生最大の危機に陥っている。

今までも、何度か『死ぬ』と思った事はあるが、ここまで八方塞がりなのは初めてだ。

隠さず言おう。今、俺は滝壺でぐるんぐるん回っている。必死に水を掻いてもぐるんぐるん。岩肌を掴もうとしてぐるんぐるん。

もはやどちらが上で、どちらが下か分からなくなってきた。

まあ、仮に滝壺から出られたとしても、上では先住民の方々が笑顔で待ち構えている。

もう一度言おう。八方塞がりだ。

そろそろ限界かな。なんか気持ち良くなってきた。寝技かけられて、オチる感覚と似てるなあ……………

『目の光が足りん！そんなんでレンジャーになろうなんて、バカにしているのか！』

（なんで教官が…）

『申し訳ありません！』

（なんで俺が怒られてんだ？）

（ああ、これが走馬灯ってヤツか）

『なあ若内、辞めてどうすんだ？』

（先輩？）

『まだ決めていません。とりあえずお金はありますので、海外へ行

こうと思います。』

（何年前だっけ…2…4…5？5年位かな。早いもんだな。）

『日本を出て何をするんだ？宛はあるのか？言葉は？』

『何をするかは、まだ決めかねています。宛はありません。言葉は…現地で覚えます。』

（先輩、心配性だな。もう会えないのかな。）

「よう。」

突然、声が聞こえた。

「先輩!？」

「おう？」

「じゃない…」

「おう。」

いつの間にか走馬灯は終わり、俺は、狭い狭い4畳半ほどの部屋に座っていた。

そして正面には、白いスーツをピッチリ着こなした、ちょい悪なイケメンオヤジがあぐらをかいていた。

「すいません、どちらさまでしょうか？」

「俺？神」

「すいません、どちらさまでしょうか？」

「だから、神」

「すいません、ヤとか、マの付く方にしか見えません。」

本物を見た事があるからわかる。この人はヤクザかマフィアだ。
「酷いヤツだな、お前は。」

「自分に正直、と言ってください。」

「やりにくいヤツだな。もっと慌てたり騒いだりしろよ。神ぞ？俺は神ぞ？」

「では、自称神様。」

「なんだ？」

呼び方は自称神で良いんだ：

「ここはどちらですか？」

「やっとか！やっとか！普通ならいの一に聞くぞ。『ここはどこ？私は誰？』ってな。」

声色変えるな気持ち悪い。見た目マフィアが女声とか、映画だったら完璧なミスキャストだぞ。

「で、そのQに対するAは簡単だ。ここは俺の部屋だ。」

「お招き頂きありがとうございます。」

神って以外と質素な生活してんだな

「他に質問はないのか？まだあるだろ？重要なこと聞いてないだろ？あるだろ、なあ？」

うん、『ここはどこ？私は誰？』って来たら、『なんでこんな所にいるの？』かな？

「なぜ私はここに居るのでしょいか？」

「それ！それだよ！鈍いなあもう。しょうがない、話してやるから、心して聴けよ！」

神って単純だな

「いいか？お前を読んだ理由はただ1つ。」

「……」

自称神が真面目な顔をして語り始めた。思わず生唾を飲んでしまった。

「お前の夢を叶えて欲しい。だから呼んだ。」

「夢、ですか？」

俺の夢というと：

「お前に、俺の世界を平和にして欲しい。」 「バカじゃないの？」

言ってしまった

「バカとはなんだ、バカとは！ 神ぞ？ 俺は神ぞ？」

「世界平和なんて無理ですよ。第一、私はさっき死んだんですよ、
滝壺で。しっかりと走馬灯も見ましたし。」

「世界平和は無理じゃない。そしてお前も死んでない。」

「無理ですし、死んでます。」

「分らず屋だな。『はい！ 平和にしてみせます』 って言えば良いのに。」

「だから、私は死んだんですよ？」

「死んでないって。俺が助けたんだからな。それに、今の発言、世界を平和にする気があると見た。」

「………」

「一から説明しようか。まずは、お前は生きてる。俺が助けた。そして、お前は『お前の』世界を平和にする事は出来ないが、『俺の』世界なら平和に出来る。」

また変な事言い始めたぞ

「つまり『お前』の世界から『俺の』世界に、お前自身がお引越
しするって事。わかった？」

…ターニングポイント？ 人生の岐路？

「あ、ちなみにお引越しを断ったら、助けなかった事にして、お
前死ぬから。」

「待てや。」

「待たない。決定事項。」

でもお引越すれば生きていられるんだよな。

「自称神様。」

「なんだ？決心ついたか？そりゃそうだよな、死にたくないもんな。」

「もし、『自称神様の』世界を平和にする気が無いにも関わらず、お引越した場合はどうなるのでしょうか？」

「お前がそれを望まない事を知っているから問題ない。」

「なんぞ、それ。俺が仮に平和にする気があったとしても、平和に出来るとは限らないのに。」

「もう質問は無いか？無いならお引越し始めるぞ。持ち物は、お前が『お前』の世界で死にそうになった時に持ってた物を返しておく。いいか？いくぞ？」

「まてまてまて」

「最後に！」

「なんだよ…。やる気削がれるなあもう。」

「なぜ自称神様自ら平和に導かないんですか？神様なら出来るでしょう？」

『俺の』世界って言うくらいなんだからさ。

「お前のQに対するAは簡単だ。俺じゃ手に余る。まあ、多少は手伝ってやるから心配すんな。行くぞー。えっさっさーい！」

「待…」

2話 決して変人ではありません

「おい！」

なんだよ、あの自称神様。タチ悪すぎだろ。

「おいてば！」

世界平和とかスケールデカ過ぎだよなあ

「誰か！医者呼んで来てくれ！」

にしても良くできた夢だったな。

「おい！しっかりしろ！医者呼んで貰ったからな！絶対助かるからな！」

滝壺に落ちて、死んで、マフィアな神に会って、死んでないって言われて、世界を平和にしてくれるなら生かせてやるって言われて、えっさっさーって飛ばされて

「医者はまだかよ！」

あら？おかしいな。

滝壺は事実だな、うん。死んだ？うん。マフィアな神にあった。これは夢だな。うん、おかしいな。死んでも夢って見るのか？

「医者あ！」

にしもうるさいな。静かに死なせてくれ：

「違う！死んでない！俺死んでない！マジかよ！夢じゃないのかよ！」

「生きてた！おい生きてたぞ！」

「うるさい！黙れ！」

考えが纏まらないだろうが。なんだよこのオッサンは

「なっ：黙れとはなんだ！黙れとは！」

あら？

「ちようど良いところにオッサンが！聞きたい事があるんだ！神はどこだ！」

「……………は？」

「神はどこだって聞いてんの！」

「おい早く医者連れて来てくれ。アタマ打ったみたいだ。」

「俺は正常だ！頭なんて打って：無くもないと思うが至って正常だ！」

バカにすんなよな。

「どうどう。落ち着け。な？すぐに医者が来るから、な？みんな見てるし、な？」

クソっ。バカにしゃがって。けど、確かに周りが騒がしい。オッサンと俺の二人きりって訳じゃなさそうだな。一体なんなんだよ。祭りか？

「っと失礼。取り乱してしまいました。2、3聞きたい事があるのですが。」

こう聞いておけばおかしいヤツには思われないだろう。

「いきなりなんだ？変なヤツだな。気持ち悪い。」

「気持ち悪いとはなんだよ！せっかく丁寧に喋ってやってんのに！人間関係は最初の会話が大事なんだぞ！」

「それより前に、バツチリ会話したじゃねえか。最悪な形でよ。」

そうだった。うるさい！とか言っちゃった。

「ならいいや。普通に喋る。とりあえずオッサン。今、どういう状況だ？」

「ああ？まあ待て。医者が来たみたいだ。とりあえず診てもらえ。それからだ。」

オッサンの視線の先を追うと、白衣っぽい服を着た老人が居心地悪そうに立っていた。

「だから、俺は正常だって。」

「いいから診てもらえって。」

そう言って、オッサンは俺の肩を押さえつけ、無理矢理寝転ばせた。なかなか力がある。

寝転ばされた俺に対して、医者がもぞもぞと触診する。腹部、胸部、頭部、と順に押さえている。

「大きい傷も内出血もありませんし、問題ないと思いますよ。ただ……」

ただ……ってなんだよ。気になるじゃないか。

「ただ……ってなんだよ。気になるじゃねえか」

オッサンが代弁してくれた。やるじゃないか。

「珍しい服と武器だな、と思ひまして……」

あん？ ああ、確かにスローイングダガーとアーミーナイフを携行してるヤツは珍しいわな。そっか、ベルトに提げたままだったか。

「言われて見れば珍しいな。ゴツツイ短剣にちやっちい短剣、それに固い生地ズボンと不自然に真っ黒い……これはチュニツクか？。靴もやけにゴツいし、底に針まで付いてる。たぶん背負ってたカバンにも何かあるだろうな。やっぱり変なヤツだな、コイツは。」

オッサンが考え込み、押さえつけていた腕が外れた。

「珍しくもないだろ？確かにナイフは珍しいかも知れないけど、服は普通だぞ？ジープンにTシャツと登山靴。」

「何を言っているんだお前は。登山靴以外、全く理解できん。なあ医者。ジープンってなんだ？Tシャツってなんだ？」

「さあ？私にも分かりませんよ。どこか遠い街なり国の服なのでは？」

「そうなのか？」

俺にふるなよ。

「いや、オッサンらが何で知らないのかが分からんよ。まさか先住民！…ではないな。ちゃんとした医者いるし。」

「俺の方が全くわからん。なんなんだお前は。どっから来た。」

「日本」

「なあ医者。大丈夫なのか？こいつ。」

「ええ。頭部にはコブ一つ見当たりませんでしたよ。」

二人してまた変人扱いしやがる。バカにすんなよな。

「オッサン！」

「なんだ？」

「さっきも言ったけど聞きたいことがあるんだ。俺の疑問に全部答えてくれ。まずは…」

「まあ待てって。ここじゃ落ち着かん。周り見てみる。」

さっきよりも視線が痛い。騒ぎを聞き付けた野次馬が集まって来たって所か？

「な？とりあえず宿舎に来い。話はそこで聞いてやる。」

オッサンが言う宿舎に向かう道すがら、簡単に状況を知ることが出来た。

と言っても、オッサンが一人で喋ってたただけだが。曰く、俺はどうも川から流れて来たらしい。カバンが不自然に浮いてるところを見た人がオッサンに言いに行ったらしい。

それで引き上げたら俺がくっ付いてた、と。俺は桃太郎かよ。けどペットボトルをカバンに入れて良かった。あれがなかったら発見されずに溺死してたな。滝壺では役に立たなかったみたいだけだな。

「おい、着いたぞ。部屋に行くぞ。早く付いてこい。」

なんか宿舎って言うより校舎だな。大学みたいだ。

「待てよ、オッサン。先に行ったらわかんねえよ。」

「いっこだ。」

オッサンの部屋は最上階4階の東奥にあった。

「まあ入れ。」

促され入る。土間がないみたいだ。オッサンを見ると土足で普通に入って行ってる。オッサンに倣い土足で入る。

「で、だ。」

オッサンが椅子に座り、テーブルに肘を乗せてこっちを見ながら言ってきた。座れって事か？

とりあえずオッサンの正面に座る。

「質問。あるんだろ？」

「ん？ああ。あるぞ。まずは、そうだな…。ここはどこだ？」

「ランシア国のランシアの町だ。平たく言えば城下町だな。なんだ？ランシアを知らんのか？」

「知らんのか？って聞かれてもな、聞いたことすらないぞ？」

「……まあいい。他は？」

言っていいものだろうか

「なあ、オッサン。」

こうなったらダメもとだ

「質問では無いんだがな、俺が違う世界から来たって言ったら、信じるか？」

「は？なんて言った？」

やっぱ、信じないよな。

「いや、いいや。忘れてくれ。」

「いいから！なんて言った！？」

なんだよオッサン。えらい前のめりだな。

「どうせ信じてないんだろ？」

「いいから！」

なんだよ。

「違う世界から来たって言ったんだよ。何でそんなに食ってかかるんだよ。信じてないくせに。」

「いや、信じる。思い返せば聞いた特徴に合致しているしな。」

は？

「まさか本当に呼ばれる人がいるなんてな。」

なに言ってるんだ、オッサン

「おいオッサン。」

「あ、そうだ。ちょっと来い。会わせたい方がいる。」

「なあオッサン！」

「なんだ？」

「なんでこんな突拍子も無い話を信じるんだよ。頭おかしいのか？」

「酷い言い種だな。これから会わせたい人から、お前の事を聞いてたんだよ。『神からのお告げだ。異世界の男を平和の使者として呼び入れた。おかしいな武器と変な服を来てるからすぐに分かる。発見次第、連れてこい。』ってな。」

神って言うと、あのマフィアか？そんな回りくどい事せずに、直接送ってくれば良いのに。

「といわけだ。ついて来い。」

「拒否権は？」

「無いこともないが、拒否してもお前に良いこと無いだろう？」

うん。確かに無いかもな。見知らぬ土地、文化、何の後ろ楯も無く一人で生きるのは苦勞するからな。多少なりとも人脈作っておかないと。

「それもそうだな。で、どこに連れていつてくれるんだ？」

「お前、遊びだと思ってるだろう？俺にとっちゃ仕事なんだぞ？それをお前は…。」

「ん？どうした？」

「お前の名前。今思うと聞いてなかったな。一応俺が謁見させる訳だし、名前知らない訳にもいかんだろ？ほら、言えよ。」

唐突だな、オイ。しかし謁見って。貴族とか有力者か？これは美味しいぞ。

「わかうち みずほ 若内 瑞穂だ。」

「ワカウチ ミズホ？変な名前だな。」

「オッサンは？」

「あん？」

「名前！」

「ああ名前ね。そういや俺も名乗ってなかったな。パックⅡフレアバードだ。」

英名チックだな。

「なあ、オッサン。ファミリーネーム…家の名前はどっちだ？」

「名前教えたんだから名前で呼べよ。家の名前って言うとなフレアバードだな。なんだ、そんなことも知らんのか？」

「うるさいな。俺の居た世界の、俺の居た国は勝手が違うんだよ。家の名前、個人の名前って順番なんだよ。」

「じゃあミズホ ワカウチか？」

「そうなるな。」

「よし、ミズホ ワカウチ！」

「瑞穂で良いぞ。」

「なら、ミズホ！」

「おう。」

「これより、王宮に向かい、国王陛下と謁見をしていただく。寛大なお方ではあるが、くれぐれも無礼の無いように！あと、なぜ名前で呼ばん。」

「ある程度高貴な人と予想してたが…限度があるだろうが！」

名前では呼んでやらない。パツクとか、オッサンには似合わない。ずっとオッサンはオッサンだ。あと、なんでちよつと可愛い名前なんだよ。気持ち悪い。

3話 いろいろと残念です…

オッサンが謁見云々を切り出してから、2時間程で都合がついたみたいだ。曰く、

『今回は、やけに早い。いつもは段取りだけで丸一日かかりたりするのにな。』

だそうだ。

オッサンが思っていたより早く事が進んだため、今俺達と言うか、馬車馬は全速力で走る羽目になっている。

「おい、オッサン。」

「なんだ。腹でも減ったか？」

「ケツが痛い。穴が空きそうだ。」

現代のアスファルトやコンクリートのような均された道ではなく、ただ畦道を圧し固めて整備しただけのようで、しょっちゅう小石や轍やらを踏んで、かなり揺れる。

「こればかりは慣れだからな。俺にはどうにもできん。座って痛いんなら、立ってたらどうだ？」

俺が困るのはそんなに楽しいか？ニヤつきやがって気持ち悪い。だが痛い。擦りきれそうだ。

「仕方ない、立つか。」

「おい。」

「なんだ、オッサン。」

「なんで普通に立っていられるんだよ。」

「立てば良いって言ったのはオッサンだろ？」

「いやな、不規則に揺れる馬車の中で立ち続けようにも、普通の奴なら直ぐにしりもちつくぞ。そこを笑ってやろうと思ったのに、計画が台無しじゃないか。」

最低だ。けど、立てないことも無いだろ？

「オッサン、立ってみろよ。」

「おう。」

オッサンのしりもち見て、多いに笑ってやるよ。

「転べよオッサン！」

「俺はこう見えて普通じゃないからな。しりもちなんざつかねえよ。」

普通じゃない？まあガタイは良いし、力も強かったな。と言うか、普通じゃないオッサンと一緒に立ってる俺も普通じゃないのか？

「俺は普通だぞ？」

「揺れるぞ。」

お？

後ろに顔を出し、地面を見してみる。どうやら畦道から石畳になったみたいだな。

「馬車はここまでだ。後は城まで歩くぞ。」

「なんで城まで馬車で行かないんだ？そっちのが速いだろ。」

「馬の足に石畳は良くないんだよ。行くぞ。城は目と鼻の先だ。」

そう言っただけオッサンは、指を指す。

「近いな！」

ホントに近い。300メートルくらいか？石畳はかなり狭い範囲で敷かれているんだな。

「おい、行くぞ。」

宿舎の時よろしく、また一人でツカツカ歩いていく。自分勝手な中年め。

「一人で行くな！」

さて、会場内の中央、玉座の間の前にいるんだが、城の作りが余りにも単純過ぎる。玉座の間まで、最初に門を2つくぐって、あとは直線とかダメだろ。オッサンの住んでる宿舎の方が、まだ複雑だったぞ

石畳からの城の距離といい、攻め込まれたらどうするんだろう。

「パックⅡフレアバードだ。謁見の準備は終わっているか？」

オッサンの分際で偉そうに

「滞りなく。」

「ご苦労。中には陛下だけか？」

「はい。陛下の命でして、警護の兵士も閉め出されてしまいました。

」

今は部屋に国王一人だけってか？どうなってんだこの国。

「おい、ミズホ。」

「なんだオッサン。」

「国王と謁見するんだ。くれぐれも、くれぐれも無礼な態度は取るなよ。」

「分かってるって。国王相手にバカやるほど愚かしくないぞ。」

「じゃあ入るぞ。」

そう言っ呼吸を整えるオッサン。緊張してんのか？

「魔道兵士隊総隊長。パックⅡフレアバードです。お告げの人物、ミズホⅡワカウチを連れて参りました。拝謁願います。」

『入れ』

「はっ。」

オッサンが扉を開き堂々とした振る舞いで部屋に入り、跪く。俺もそのまま真似して跪いて見る。

『パック隊長、ご苦労。もう下がっても良いぞ。』

「はっ。」

ああ、ああ、出てっちゃった。普通、国王と二人きりにするか？

『ミズホ||ワカウチ』

「はっ。」

オッサンの真似して言ってみた。

『近くに』

「はっ。」

顔は上げない方が良くと思って、中腰の変な格好で移動する羽目に。恥ずかしいぞ。

「ミズホ||ワカウチ」

「はっ。」

「顔を」

「はっ。」

どう上げるべきか分からず、カクカクとした動きになってしまった。

「久しぶり。つってもそんなに時間経ってないな。8時間くらいか？」

「は？」

「なんだよ、もう忘れたのか？ 神ぞ？ 俺は神ぞ？」

良く良く見ると、そこには確かにマフィアな神が立っていた。

白スーツは着てなかったが

4話 魔法と魔法兵士

「いろいろ聞きたい事もあるだろうが、まずは『俺の』世界によろこそ。と言っておこうか。」

マフィアっぽくない神が言った。スーツを着ていないと、ただのイケメンじゃないか。イケメン反対！

「あなた、神ですよね？」

「おう。神ぞ。」

「そして、国王でもあると。」

「おう。国王ぞ。」

「一から説明をお願い申し上げます。私の頭では処理しかねます。」

「神としてこの国を作った。そして、国王として君臨している。簡単だろ。」

代替わりとかどうするんだろうか。もしや国民は、王が神様って知っているのか？

「国民は、あなたが神であると言うことを知っているのですか？」

「知っているわけ無いだろ？知られるとまずいつて訳ではないんだが、建国以来隠してきたんだ。今更言えねえよ。恥ずかしい。」

恥ずかしいから言えないのかよ。バカじゃないの？

「代替わりはどうかさるのですか？ずっと同じ方が在位なさっているのは、不都合があるのでは？」

「まず嫁さん作るだろ、子供生まれるだろ、んで、その子供は俺の片割れ。俺の片割れが後を継いで、俺が死ねば、片割れが俺になる。つまり、一時期俺が二人いることになるな。」

気持ち悪！

「大変、気持ち悪いことですね。」

「丁寧に喋れば何言っても良いって訳じゃないぞ？」
「失礼しました。」

これでもオブラートに包んだのに。

「まあ俺の話はこころ辺にしておこう。お前：ミズホのこれからの話に移りたいんだが。」

願ってもないことだ。指針を出してくれるなら右往左往したくて済む。

「はい。お願いします。」

「まずミズホにはパック隊長の下で魔法兵見習いとして、この国に遣えてもらう。」

「魔法兵見習いですか？」

「おう。うちのエリート部隊だ。」

魔法兵？魔法が使える兵士かな？

魔法！？

「魔法あるの！？俺に魔法を使えと！？」

「魔法はこの世界にいる人間なら全員使えるぞ？例外はなし。ミズホもこっちに引っ越して来たときから使えるようになってるぞ。」

ファンタジーだ。

「それなら、魔法兵がエリートである意義が無いと思うのですが。魔法が特別でないなら、何も魔法に特化しなくても。」

「戦いに使える魔法のエリート。と言えいいか。魔法と言ってもな、全部が全部戦いに使える訳じゃない。ほとんどの人が魔法を生活を豊かにするために使っている。ミズホの世界の電化製品？のようなものだ。」

もしか俺は特別な魔法が使えるのか？神に選ばれた位だ。派手な魔法が使えるに違いない。

「詳しい魔法の話はパック隊長に聞け。あいつは魔法に関しては、作り出した俺には劣るが、超の付くほどの実力者だ。」

オッサンすごいな。神に認められてるよ。

「パック隊長！入れ。居るのだろうか？」

「失礼します。」

オッサンが呼ばれ、部屋に入って来た。多少照れているように見受けられる。盗み聞きしてたな。いいのか、神？

「オッサン、どこから聞いてた？」

「な、なにも聞いてないよ？」

「パック隊長はさつき着いたばかりだ。せいぜい『超の付く実力者』あたりではないか？」

「恥ずかしながら。このような形で、王からお褒めの言葉を頂くとは思ってもありませんでした。」

「まあ盗み聞きくらい別にいい。あらかた察しているとは思いますが、ミズホを魔法兵見習いとしてパック隊長自ら鍛え上げて欲しい。」

「はい。神が遣わせた者です。素晴らしい素質を持っていることでしよう。全身全霊を懸けて、素晴らしい魔法兵にして見せましょう。」

やっぱり俺には魔法の才能あるのか？

「あ、ああ、ま、いっか。」

なんだよ元マフィア神。はつきり喋れ。

「ミズホも疲れているだろう。訓練は明日から始めるとして、今日のところは休ませてやれ。」

「はっ。失礼しました。」

着いてこいと言わんばかりに俺へ視線を向ける。

「失礼しました。」

「おう。また呼ぶからな。」

「ミズホが部下か。苦勞しそうだ。」

宿舎のオッサンの部屋に戻り、オッサンが話始めた。

「本格的な訓練は明日からと言われているしな、どうする？」

「どうする？と言われても、魔法なんて知らないからな。こっちがどうする？って聞きたいくらいだ。」

「そうだ、聞けば良いんだ。」

「なあ、魔法って一体なんなんだ？人間は全員が使えるって、か…王が言ってたが。」

「その通りだ。人間は必ず何らかの魔法的な素質を持っている。そ

の素質によって、魔法兵になれるかが決まる。」

「素質が開花しない事は無いのか？」

「無い。大昔はあったようだがな、今は生活のすべてに魔法が使われていると言って良いほど魔法が溢れている。素質は魔法的な物に触れる時間が多いほど開花し易くなる。それに素質を引き出す魔法もあるからな。適性があるけど、開花してない魔法兵候補は、その魔法で開花させる。」

「もしかして、俺にもかけるのか？その魔法。」

「明日かけるぞ。」

やっぱり

「痛くない？」

「ちょっと圧迫感がある位だ。痛くは無いぞ。」

なら安心だ。無理矢理こじ開けるって感じのニュアンスだったかな。よかったよかった。

「あと、魔法兵の適性ってなんだ？」

「ああ、簡単に言うと、どの魔法と相性が良いか。だな。」
分からん。

「詳しく。」

「ああ。魔法兵は戦闘用の魔法の達人だ。」

「それは王から聞いた。」

「そうか。それで、戦闘に使える魔法は限られていてな、火に属する魔法と風に属する魔法の適性がある者だけが魔法兵になれる。」

やっぱり属性があるんだな。

「他の、火と風以外の属性は何があるんだ？」

「地と水だな。2つとも戦闘にはあまり向いてない。だが、生活には欠かせない魔法だ。」

「光とか闇とかは無いのか？」

「光と闇は、両方とも火の派生だ。光は光源が無いと存在しない。火を光源として存在させる。同じように闇は、光があるから闇という概念が生まれる。」

火、カッコいい。良いね火。是非とも使いたい。

「オッサン詳しいな。見直したぞ。」

「隊長だぞ、俺は。」

さすが、神が誉める実力者。

とにかくにも、火の魔法。使ってみたいもんだ。

5話 適性検査

「あ、そうだ。」

「なんだオッサン。」

「ミズホの部屋だがな、宿舎に空きがないから、俺と相部屋だ。」

うわ。むさっ。オッサンと共同生活かよ。まあ慣れてるっちゃ、慣れてるから別に良いが。

「それで、明日の訓練に係るんだが、ミズホの適性を見ておこうと思ってな。」

待ってました。

「で、どうやって見るんだ？」

「ミズホの唾液とか、血とか、皮膚とか、髪の毛とか、爪とか、とにかく体の一部を測定器に入れるだけだ。簡単だろ？」

あやしい儀式？

「おい、露骨に嫌そうな顔をするな。」

血とか髪の毛とか、どう考えても眉唾物だろうが。…まあ魔法も十分眉唾物だが。

「良いから行くぞ。引っ張ってでも連れていくからな。」

「えー。」

オッサンに引き摺られ、宿舎裏にある訓練施設棟に連れてこられた。

宿舎もなかなかの大きさだったが、訓練施設棟はさらに大きい。多目的に作られている、とオッサンは言ってたが。

「大き過ぎないか？」

「宿舎もそうだが、魔法兵士隊だけが使ってる訳じゃないんだぞ。騎士隊、魔法士隊、近衛隊、王城警備隊全部が使うんだ。この宿舎と訓練施設棟はまだ小さい部類だ。」

「他にも同じようなものがあるのか？」

「言ってなかったか？ここより規模が大きい施設があと3つあるぞ。」

「オッサン、もしかして肩身狭いのか？」

「なんでそうなる！」

だって、なあ。

「隊長なのに一番小さい施設って。いじめられてんのか？」

泣けてくるなあ。

「違う！総隊長と副隊長、あと分隊長とそれらが認めた小隊長が一ヶ所に集められてるんだよ。」

「普通そういうやからは分散させないか？訓練の時都合悪いだろ？」

「逆だ。強さが段違いすぎて別棟のやつらと一緒にやると死人が出かねん。」

「死人？大袈裟だな。じゃあ別棟に教官をする上司はいないのか？」

「この棟にいない小隊長とその下に就く班長がやっている。」

わからん。隊長なり副隊長なり、実力のある奴が指導した方が絶対がいい筈だ。

「俺はどこで訓練するんだ？やっぱり…」

「ここに決まってるだろ。陛下ご自身が直接俺に降された勅命だ。俺が手ずから育てる他無いだろ？」

だと思った。なんだよマフィア神が言えばちゃんと格下でも訓練するんじゃないか。

「オッサン、殺さないでくれよ。」

「はっはっはっ」

白々しい。

『あの。』

誰だ？後ろから美人っぽい声がしたぞ。

『物凄い邪魔。さっさとどいてくれる？』

訂正声だけ美人。

「すまない。見習いに説明してたら夢中になってた。これから訓練か？」

「ええ。でも相手がいないからどうしようかと思っていたの。どこかに魔法が上手くてガタイのいい総隊長でもいいんだけど。」

オッサンが冷や汗をかきながら振り向き話しかけた。オッサンが振り向いたから俺も振り向くべきだよなあ。

声だけ美人。改め、声と顔美人

「オッサン。」

「なんだ？」

「この声と顔だけ美人は誰だ？」

「：俺の部下だ。」

部下に冷や汗かくなよ。

「サラ||シエルリングよ。見習いの分際でここに来るなんて頭大丈夫？わいてない？」

「オッサン。」

「なんだ。」

「中入ろうか。」

「待てミズホ。関わりたくないのは分かる。だがな、名前聞いておいて、名乗らないのは余計に面倒になるぞ。」

仕方ないか

「ミズホ||ワカウチ。今日から魔法兵士見習いとして配属されたっぽい。」

「だっさい名前。」

そう言ってサラは訓練施設に入っていった。

「何者？」

「魔法兵士隊第2分隊長。」

「きつついなあ。もしかして、あんな奴ばかりか？」

「適性みるぞー。早く入れー。」

答えろや

オッサンに『訓練準備室』なるところに連れてこられた。準備室
って言う割りには埃っぽくない。まめに掃除しているんだろうな。

「これが適性検査瓶。これに唾液、血液、皮膚、髪、爪を入れるだ
けでどの魔法に適性があるか分かる優れ物だ。」

デデンと並べられた4つの小瓶。形はまるつきりタバスコの瓶だ。

「まずは、そうだな。火からやってみるか。髪の毛貫うぞ。」

プチンと俺の髪の毛を抜くオッサン。ハゲるだろうが。

「入れたらどうなるんだ？」

「適性があったら瓶の口に火が灯る。」

そう言ってオッサンは瓶の口から髪の毛を入れる。

「火、つかないじゃないか。」

「火には適性が無かったようだな。」

いきなりかよ。火が良かったなあ。

「まあ、まだ風がある。髪の毛貰うぞ。」

またもやプチンと抜かれる。ハゲ散らかるだろうが。

「今度はどうなるんだ？」

「瓶の口から風が吹く。」

「おい、オッサン。」

「な、なんだ？」

「壊れてる？」

「そんなことない…とは思うんだが。」

オッサンは自分の髪の毛を風と火、両方の瓶に入れる。
ポツと火が灯り、ヒュッと風が吹く。

「壊れてないな…」

というよりオッサン。両方に適性有るのかよ。

「念のため、水と地。やっておこうか。」

そう言ってまたもやプチンプチンと俺の髪の毛を抜くオッサン。
将来がちよっと心配だ。

「水と地はどうなるんだ？」

「水は瓶の底に水が溜まる。地は瓶の底に砂が出来る。」

「水、貯まったな。」

「砂、出来てるな。」

「確か魔法兵士って火と風のどっちかに適性が無いとなれないんだ
よな？」

「ちょっと陛下に会ってくる。ミズホは部屋に戻ってろ。」

そう言い残してオッサンは走り去った。

もしや、いきなり解雇の危機？

6話 パック、奔走。

「陛下はどちらにおられる。」

「パック隊長？先程お帰りになられたのでは？」

俺は、ついさっき訪れた玉座の間の扉の前まで来ている。ミズホの事を陛下にご相談しなければ。

ミズホには適性が無かった。俺としては適性が無くても別にいい。まだ会って半日ほどだが、ミズホが気に入った。

会っていきなり『黙れ』と言われ、俺の事をオッサンと呼び、魔法兵士隊総隊長と知っても、俺との距離を変えない。

良く言えば、裏表がない。悪く言えば、無遠慮。

ここまで遠慮、というよりも心理的な壁を作らない奴は、サラ以
来か。

とにかく俺は、ミズホが気に入った。他の奴には任せられない。だが、『魔法兵士隊総隊長』という役職がそうはさせてくれない。1つ例外を作ってしまう。前例が出来てしまう。前例があれば、それを引き合いに出してくる輩も出てくるだろう。

それだけは避けなければ、これまで続いた魔法兵士隊の秩序が崩壊してしまう。

「ミズホ！ワカウチの事で陛下にご相談がある。陛下は中に居られるのか？」

『おう。居るぞ。入れ入れ。』

中から陛下が声を掛けてくださった。なら話は早い。

「失礼します。」

「ミズホの事だな？」

「はい。明日に先駆け、適性を見てみた所、ミズホⅡワカウチの適性は水と地。火と風は欠片も見受けられませんでした。」

「そう都合良く事が運ぶわけないか。どうしようか？」

「どうしようか、と申されましても…。私には判断しかねます。」

「パック隊長はどうしたいんだ？」

「…私個人としては受け入れたいと。ですが、隊長としては、受け入れる訳には行きません。」

「どうしようか？」

「私には分かりません。ただ、前例を作ることだけは避けたいのです。」

「うーん、難しいな。」

陛下が特別に入隊を許可したとしても、ミズホの風当たりは恐らく強くなる。無用な争いの火種になるかも知れない。

「前例、作っちゃおうか。」

「ですから…」

それはダメだ。

「ミズホ以外に到底越える事の出来ない試験を設ければどうだ？ 『適性が無いものはこの試験を通過すれば入隊可』 って感じで。」

「……具体的には？」

「そうだなあ…。ミズホは魔法使えないし、かといって筆記試験だと反感買いそうだな。」

紙一枚で入って来た奴なんて、実力主義の俺の隊では認められないだろうし。

「魔法使わない隊って有ったっけ？」

「王城警備隊です。」

近接戦の達人達の集まりだ。城内で魔法なんて使ったら被害が尋常じゃない。その為、近接戦に特化した部隊。

「もしや、ミズホを王城警備隊に？」

「いや、魔法兵士隊と言っても基本は兵だろ？ 魔法が基本の魔法士隊とは違って近接戦闘も視野に入ってるはずだ。」

「仰る通りです。」

「近接戦の能力が魔法兵士隊の水準を大きく越えていたら、ちょっと位魔法が出来なくても良いだろ？」

「ええ。まあ。…ですが。」

「緩すぎるって言うんだろ？魔法兵士隊の水準を越える位なら結構いるかも知れないしな。」

「はい。」

魔法兵士隊の近接戦の能力は低いとも言えないが、決して高いとも言えない。

「……………そうだなあ。王城警備隊の隊長と決闘なんてどうだ？」

「無謀過ぎます。」

アイツは馬鹿げている。素手で城壁さえ崩せる男だ。ミズホが死ぬ。

「かといって班長クラスだとちょっと緩いよなあ。副隊長か分隊長位が妥当か。」

「副隊長、分隊長になりますと私でも勝てるか分かりませんよ。ミズホならなおさらです。」

隊長よりはマシだと思うが。

「あれ？ミズホから聞いてない？」

「何をですか？」

「アイツ、達人級だぞ。」

「口の悪さですか？確かに悪いとは思いますが、達人級では無いと。達人級なのはサラの方だと思います。」

「違う、違う。聞いてないなら良いや。」

どういう事だ？

「そう言うことだから、王城警備隊の副隊長に『明日、隊長宿舎の訓練棟の王城警備隊訓練室に来い』って連絡しておいて。俺は内務が溜まっているんだ。」

そう言って陛下は奥に引っ込んでしまった。

「明日ですか！？また急ですね。」

宿舎に戻り、副隊長達が住む3階に来ている。全部で5隊×2名分の10部屋あるが、広さは俺が住む4階と変わらない。隊長は5人だから、4階の部屋の広さは、単純に3階の2倍だ。

「悪いとは思っているんだ。だが魔法兵士隊の為だ。手伝ってくれないか？」

「断る理由なんてありませんよ。ただ余りにも急で、驚いただけです。」

「悪いな。あと、武器は訓練室にある物なら何を使っても構わないからな。」

「はい。わかりました。では明日。よろしくお願いします。」

ミズホにどう説明しようか…

7話 どうしよう

「オッサン、遅いな。日が暮れてきたぞ。」

神に会いに行ったみたいだが、何をしに…まあ十中八九俺の事だろうな。

俺自身もがっかりだ。まさか両方の適性が無いとはな。

どうなるんだろう、俺。神に『やっぱりお前いらぬ。死んどけ。』とか、ファンキーな死刑宣告されるんだろうか。

逃げるか？ いや、神の事だ。夢に出てくる。そして死刑宣告。人生詰んだなあ。まあ滝壺で一回詰んでるから良いんだけどさ。

「ミズホ。居るか？」

オッサンか。

「おう。居座らせて貰ってる。ところでさ…」

「明日。入隊試験を実施する事になった。」

「は？」

「試験の内容は模擬戦。王城警備隊副隊長と1対1で戦う事になった。」

「待てよ、オッサン！」

「なんだ？」

なんだ？って…俺が言いたい位だ。

「俺、適性無かったんだろ？試験なんて受けられるのか？」

「逆だ、逆。適性無いから試験を受けるんだ。普通は適性と素質で通るんだよ。試験なんて俺も初めての事だ。」

「誰がそんな事決めたんだ？オッサンか？」

「俺と陛下だ。」

ふーん。

「なあ、王城警備隊？の副隊長ってどれくらい強いんだ？オッサンよりは弱いだろ？」

「魔法無しなら多分俺が負けるな。魔法有りなら俺の余裕勝ちだ。」

その副隊長さんは、魔法使えないのか？それに…

「仮にも隊長のオッサンより強いかも知れないヤツとサシでやれと言うのか？」

「陛下のご意見だしな。それに、王城警備隊は魔法を使わない。陛下の仰る事が本当なら、ミズホでも勝てるかも知れんぞ。」

あのマフィアは何を言ったんだ。

「なんて言ってたんだ？」

「ミズホは達人級だぞって仰っていたな。つまり強いって事だろ？」

「ああ？ うん、まあ2つ前の職業柄だね。そこそこ。でも達人って程じゃ無いんだがなあ。」

一般人より強い位かな？

「けど陛下は、確かに仰っていたぞ。達人級だって。」

「ああもう。いいだろ、その話は。俺は普通。分かった？」

「まあ、明日には分かるからな。」

「それよりさ、その試験って素手でやるのか？」

ファンタジックな武器が出てきたらどうしよう。燃えてる剣とか

「相手には、訓練室の武器は何を使っても良いって言ってきたぞ。ミズホはどうする？ その、腰の短剣使うか？」

アーミーナイフとスローイングダガーか。愛着があるわけでも無いしなあ。惰性で身に付けてるって感じだったし。

「オッサン。その副隊長さんが、何を使うか分かるか？」

「直剣か短槍、あと体術位か。警備隊の特徴でな、長物はあんまり使わない傾向があるんだ。」

ふーん。やっぱりあれか？ 城の中で戦うことを想定してるのか？

「じゃあ、スローイングダガー…投げ短剣？って言えば良いのか？これ使うよ。あとは素手で。」

ダガーは3本しかないけどさ

「それだけでいいのか？長槍とか、弓とか、鞭とか、いろいろあるんだぞ？明日見てから決めたらどうだ？」

オッサン必死だな。あいにく、全部使ったことが無い。

「オッサンが言ったヤツ、全部使ったことない。使えない武器を持つとか、頭の悪い子がする事じゃないのか？」

「う…。心配してやってるのに。もう、知らん！あっちの部屋で寝てろ！負けちまえ！」

入り口の対角線上の角にある部屋を指差し、ぷいとそっぽを向いたオッサン。俺の部屋か？

「なんだよ。本当の事言っただけだろ？拗ねるなよ。な？な？」

「……………」

無視かよ。

「飯は？」

「……………」

ナシかよ。

「じゃあいいや。部屋、有りがたく使わせてもらうぞ。」

メシどうしよう

8話 試験の前に初体験

昨日は、どうもオッサンの機嫌を損ねたようで、異世界初のメシが、鞆の中に入っていたツナ缶とマヨネーズだけだった。

チョコレートも入っていたんだが、滝壺のせいか、ぐちよぐちよになってしまっていた。代えのパンツがまっ茶っ茶だ。

「オッサン。」

「……………」

「おい。」

「……………」

「メシないの？」

「ん……………」

喋った！喋ったよ！動くオッサン。キッチンに向かう。

「ほれ。」

手渡されたのは小袋の中には茶色い種。

「なにこれ。」

「麻の種。」

「どうしろと？」

「食え。」

「え？」

「栄養あるぞ。」

知ってるけどさ。行軍向きの保存食だけどさ。

「オッサン、毎日これ食ってんの？」

「もちろん。朝はこれしか食わんぞ。」

「健康的な不健康さだな。」

「やらんぞ？」

「食う。」

空気が重い。緊張で口が乾く。乾いたところに乾燥した麻の種を放り込むもんだから、余計ボソボソする。幼児、老人なら窒息しかねんぞ。

この空気を打破せねば。やっぱり昨日の武器云々のせいだろうな。謝っとくか

「オッサン。」

「なんだ。」

「昨日はスマン。」

「……」

「せっかくオッサンが奨めてくれた武器、録に話も聞かずに断ったのは悪かった。でもな、」

「わかってる。試験とは言え、実戦だ。命の保証が出来るとは言えない。ましてや副隊長だ。初めての武器を使わせようなんて、俺の思慮が足りなかった。悪かったな。」

両方が頭下げることになるとは。まあいいか。丸く収まったし。

「それで、もう訓練室行くのか？」

「いや、その前に素質の開花を済ませておく。」

「なんで？」

「適性のある魔法なら直ぐに使えるようになるからな。ミズホの場合、直接、戦いに使えるような魔法じゃないが、注意を反らす位は出来るだろ。」

「ふーん。使えないより使えた方が便利ってだけか。なら、始めてくれ。」

「おう。昨日も言ったように、ちょっと圧迫感があるからな。」

「はいはい。」

「やるぞ。」

オッサンは、そう言うと、俺の胸骨の辺りと臍の下辺りを押さえた。

なんか普通だ。もっと大層な儀式的なものをやるのかと思っただが、拍子抜けだ。

「圧迫感、来るぞ。」

「お、おう。」

キュン、キュンと来た気がする。

例えるならそうだな、臍の下の方は小便を我慢しようと力を下腹部に込めた感じ。

胸骨の方は、目一杯深呼吸して肺を膨らませた感じ。

やっぱり拍子抜けだ。

「終わりか？」

「おう。痛くなかっただろ？」

「まあな。それより魔法、もう使えるようになってるんだろ？使いたい方、教えてくれよ。」

「もちろんだ。とりあえず訓練棟行くぞ。ここで魔法なんか使ったら、部屋が汚れる。」

「おう。」

片付けるのは勘弁だしな。

訓練棟グラウンド

「魔法って言うのはな、簡単に言うとは想像力の具象化だ。」

「簡単じゃねえよ。簡単にし過ぎて分かりにくい。」

一言で纏めるな。こっちは概念も何も無いんだぞ？

「そうだな：例えば、俺は火と風に適性がある。これは、火と風を頭で思えば実際に火と風を出すことが出来る。見てろ。」

そう言うとおっサンは、右手の人差し指を立てた。

おっサンの指先には火が灯る。そして左手の人差し指を火に近づけると、火は揺らめき、空気を取り込んでどんどん大きくなっていく。

「で、この火をもっと大きくして、さらに強い風を送って弾けさせると……」

おっサンがグラウンドの中央に膨らませた火を投げ、さらに膨らませると

『ドンッ』

低い破裂音が辺りに響き、地上に花火が上がった。

「…すごっ。…こわっ」

なにこのオッサン。あり得ねえよ。

「これが火と風の破壊力だ。基本でこの威力だ。魔法兵士隊が欲しがるのもわかるだろう？」

「うん。十分過ぎるくらいに分かった。」

基本でこれかよ。

「さっきも言ったように、要は想像力だ。明確に頭に浮かべた物を出す。明確に頭に浮かべた様に操る。それが魔法だ。考え、学習し、応用する事の出来る、人間だけの技だ。」

じゃあなんで

「なんで適性なんてもんがあるんだ？頭に浮かべた物を出すだけなら、適性なんて関係無くないか？」

「明確ってのが重要なんだ。適性ってのは、その人が生まれ持つて想像しやすい物、って言えばいいか。だがな、」

オッサンが言葉を一旦切り、手を広げると、オッサンの手のひらから、おびただしい量の水が溢れてきた。

「適性が無い魔法でも明確な想像さえ出来れば具象化出来る。だが、適性が無いからこれ以上の水の想像は難しい。水に関すれば、これが俺の限界だ。」

想像さえしつかり出来れば適性の無い魔法でも使える。けど適性のあるヤツよりは使えないってことか？

「つまり俺でも火と風が使える、と？」

「そうなるな。だがな、恐らく使えるようになったとしても基本が出来るくらいだし、さっき俺が出した火と風の複合はかなり難しいだろうな。」

オッサンは続ける。話長つ。まあ聞いたのは俺なんだが。

「適性無しの魔法を練習するよりも、適性有りの魔法を練習するほうがより早く強くなる。ミズホも今は火と風の事は忘れる。その内俺が教えてやるから。それよりも水と地だ。」

「おう。イメージ：想像すればいいんだな？」

「そうだ。想像した物が明確なら、直ぐに出てくる。」

何をイメージしようか……。漠然と水って言われてもな。分からん。雨、川、海、雪、雪？雪って水か？違うよな。井戸、水道、湧き水。温泉、噴水、水溜まり。違うよなあ。

間欠泉、滝、消防車。

ん？滝？滝か。滝だな。滝に落とされたからこっちに来たわけだし

な。良いかも。

出る！

「出た！」

あっさり出たな。こんなもんなのか？

「なあオッサン。こんなに簡単で良いのか？ あっさりオッサンが出した量くらい出たぞ。」

「出せて当たり前だ。ミズホは適性有りなんだからな。それに、この世の人間の恐らく全員がなんらかの魔法が使えるんだ。難しい訳が無いだろ。それに、火や風と違って、水と地は触る事が出来るんだ。想像もしやすいし、適性持ちも多いんだぞ。」

「ふーん。じゃあオッサン。地の魔法見せて。」

「おう。」

オッサンは膝を着いてグラウンドに手を当てた。

オッサンの手の周辺の土がみるみる崩れて砂になっていく。

「俺は水以上に地が苦手だな、触っていないと想像出来ないんだ。だからこれくらいが限界だ。」

オッサンの手があった場所には、20センチ弱程の蟻地獄が出来ていた。

「オッサン。これ、凄いな。」

「気を遣っているのか？ そんなもんはいらんぞ？ 俺には火と風があるからな。」

「違う違う。俺が気遣いなんてするかよ。普通に使える魔法じゃないか。」

オッサンの蟻地獄をイメージして、手をグラウンドに着ける。

「とうっ！」

ベコツとグラウンドがへこむ。オッサンの2倍位の蟻地獄が出来上がった。

「オッサン。」

「なんだ。」

「ありがたいな。俺、余裕で勝てるかも知れん。」

だって、水と地。案外使えそうだもん。

9話 試験開始

「これより！第1回魔法兵士隊新兵選抜試験を始める！」

神が高らかに宣言する。訓練棟グラウンドにはオッサンと俺、恐らく隊長か副隊長だと思われる10名ほどがグラウンドのへりに疎らに立っている。

お前らの国王が宣誓してるのに、集合もしないとは。

あ、声と顔だけ美人のサラ副隊長もいるな。

「受験生、魔法兵士隊見習い候補ミズホ〓ワカウチ。前へ。」

「はい。」

オッサンに魔法を教わった後、時間が余ったから、オッサンにいろいろと聞いておいた。

「試験官、王城警備隊副隊長、ライズ〓ヘンフ。前へ。」

「はっ！」

真面目そうな人だな。さわやかイケメン！って感じで、肉付きはあまりよろしくない。

本当に副隊長か？強そうに見える

オッサン以上に強いらしいが、体格はオッサンの方が良いしな。

オッサン、訓練サボってんじゃないか？

「ミズホさんですね？よろしくお願いします。」

「御丁寧にどうも。ミズホⅡワカウチと申します。見たところまだお若いのに副隊長とは、素晴らしい才能をお持ちとお見受けします。どうか、お手柔らかに。」

こう言っておけば手加減してくれるかな？

「ははっ、手加減させていただきますよ？あくまで試験ですので。」

「では、胸を借りるつもりで戦わせていただきます。」

「でも、あっさり負けるつもりはありませんよ。」

「ミズホ…緊張感持てよ！談笑してる場合か！？」

陛下は勝てると仰り、ミズホも勝てる算段が付いたと言うが、正直不安だ。

魔法をミズホに教えたあと、いろいろと質問してきたが、どう使おうと水と地は戦闘に向かない。

下手に魔法を使うより、そのまま戦うべきなのだが、ミズホは恐らく使うだろう。

それが俺の不安を余計に掻き立てる。

『両者、礼！始め！』

始まってしまった。声くらい掛けてやったら良かったな。

この人は何がしたいんだ？武器も持たず、構えず、ただ立っているだけ。

礼もした、号令もかかった。普通、もっと気持ちが前に出るはずなんだけど。

「構えないんですか？」

「構えているかも知れませんが、構えていないかも知れません。」

これは、構えていると取っていいのかな？

「じゃあ、遠慮なく。行きますよ！」

剣の切っ先が全くぶれない、美しい突きが迫って来た。

「っと」

左膝の力を抜いて、上体を左に傾けかわす。

本当に遠慮ないな。頭狙って来やがった。

けど、やっぱり手加減してくれてるみたいだな。そんなに速くない。

けど剣が鬱陶しいな。
もらっておくか。

かわされた？多少手加減したとは言え、それなりの速さだったのに、まるですり抜けた様にかわされた。

とりあえず小手打ちで様子を見ようか。いや、受験生相手に様子見なんて、副隊長のすることじゃないな。

不可避の速度で、上段から叩き潰す。もとい寸止め。

これなら怪我もさせないし、副隊長にふさわしいかな？

ライズ副隊長が上段の構えを取る。

お、おいしいな。

待ってましたと言わんばかりに、接近する。

『ふっ』と短く息を吐く音と共に、さっきの突きより、幾ばくか速い袈裟斬りが迫って来る。

息づかいが聞こえるほど近かったら余裕だ。副隊長、手加減す

ぎ。

振り下ろされる副隊長の左肘の外側、ファニーボーンって言ったかな？そこに軽く右拳を当てる。

反射運動で左手が開く。後は残った右手を、剣ごと外側に捻れば：

「貰いましたよ。副隊長。」

何が起きたんだ？左手は痺れ、剣を奪われた。

魔法か？でなければあの速さの袈裟斬りをかわして剣を奪うなんて出来ない。

「魔法…使えるんですか？」

「ん？何がです？」

「僕の剣を奪うのに、魔法使いましたよね？」

「いえ、魔法はまだ使ってませんよ。それよりも副隊長さん、手加減しすぎです。勝たせていただけるのはありがたいのですが、不審がられますよ。」

言うほど手加減なんて出来ていない。さっきの大上段袈裟斬りも、寸止めをしようとは思っていたけど、振り下ろす時は全力だったし、踏み込みも浅くはなかった。

「ははっ。そうですか…」
笑うしかなかった。

でも、剣を奪われたって僕には、拳がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0794h/>

神に呼ばれて来てみれば

2010年10月9日03時52分発行